

大学卒業後の歯学研究を振り返って

寺田善博

今回の奥羽大学歯学誌の巻頭言執筆をお引き受けするにあたり、奥羽大学歯学会会則をみましたら、第3条に「本会は、歯学及びこれに関連のある科学についての研究・交流並びに提携の促進をはかり、学術文化の発展に貢献することを目的とする。」とありますので、私の大学卒業からの40余年を振り返ってみることに致しました。

私は昭和48年3月に九州大学歯学部を卒業し、父親が開業歯科医師ということもあり、同年4月に何となく九州大学歯学部歯科補綴学第一講座に研究生として入局し、歯科医師免許取得後に附属病院の医員に採用されました。新人はいずれかの研究グループに所属していわゆる下働きをさせられることになっていました。私の最初の仕事は、当時の講師、医局長である先輩の先生の学位論文の仕事のお手伝いでした。ほぼ毎日夕方から夜遅くまで実験の手伝いをしていました。私の所属している講座はクラウンブリッジの担当でしたが、当時の研究テーマは、放電爆発エネルギー利用による圧印床の製作でした。講座の分担は、学生の教育はクラウンブリッジでしたが、研究や臨床は補綴ということで区別なく自由にやっていました。先輩の先生の学位論文が完成したあと、せっかく実験手法もある程度マスターできたので、これを今後に生かしていこうと思いました。先輩の先生のテーマは全部床義歯に関するものでしたが、金属床とレジンの維持装置として線爆溶射法を応用して微小な凹凸を形成するものでしたので、これを硬質レジン前装冠の維持装置として応用できないかと思い、私なりに実験計画を立てて研究をスタートさせました。最初は、線爆溶射法と通法のリテンションビーズとの維持力の比較などから始めましたが、ちょうどいい時期にカラーアナライザーを買ってもらえることになり、色調の研究に取り掛かりました。色調の研究を始めてから、レジン前装冠だけでなく陶材焼付冠の研究にもとりかかりました。さらに陶材焼付冠の熱による変形にも興味をもち、当時あまりなされていなかったX線応力測定装置を使える環境が得られ、いわゆる審美補綴に関して色調測定や非破壊的応力測定を行い、その延長線上でオペーク陶材の下地金属色の遮蔽に関する論文で歯学博士号を取得しました。その後講師に昇任し、その時期からできればずっと大学に残って教育、研究、臨床をしていきたいと思うようになりました。

その間、前任教授が研究要員として私と同じ年の理学部出身者を文部教官助手に採用しました。当時、講座では日本語の単著論文を補綴歯科学会誌に投稿して学位論文にしていたのですが、理学部出身の同僚から論文は英語で書かないと外国の研究者はだれも読んでくれませんよと言われました。そこで、補綴の領域では国際的な Journal of Prosthetic Dentistry に投稿することにしました。彼の手助けもあり、2年以上かかっ

て初めて国際誌に論文が掲載されました。そのときの経験を生かして、その後、International Journal of Prosthodontics に3報続けて掲載されました。結果論ですが、このときの業績が教授昇任につながったものと思っております。

私の実質的な研究者としてのスタートになった学位論文の主査が歯科理工学の教授でしたので、それがきっかけとなり歯科理工学会に入会し、九州大学を定年退職するまで10年以上臨床系の理事を務めさせて頂きました。歯科理工学会をきっかけに歯科審美学会や接着歯学会にも入会し、いろいろな先生方と交流を深めました。

私の持論ですが、私にとって補綴学会の先生方とは特に努力しなくても交流は可能ですが、それ以外の領域の先生方とは自分の意志で学会参加等していかないとなかなか仲間として認めてもらえません。最初はいろんな学会に参加してもよそ者扱いですが、10年も参加していると何とかメンバーとして認めてもらえるようです。そのようなことの延長としていろいろな国際学会にも参加することができ、幅広い交流ができました。さらに見聞をひろげることもできたと思います。

また、本学でも国際交流を重要なものと位置づけ、海外留学や学生の国際交流を推進されています。私は前任校で23年間にわたり、JICAの集団研修に関わってきました。最初の頃は約10人相手の講義ですが、正直言ってどのような講義をすればいいかわかりませんでした。数年後、当時の学部長でもあるコースリーダーから現地調査への誘いを頂き、喜んで行かせて頂きました。1999年11月末から約2週間の予定で、ケニアとガーナの現地調査でしたが、その内容は以前参加した研修員の現状把握と現地公開セミナーの他、関係機関の訪問など大変貴重な経験をさせて頂きました。翌年からの講義においては、何となく彼らのバックグラウンドが理解できるような気がして、講義をするのが楽しくなってきたことをなつかしく思い出します。最後の2年間はJICAコースの責任者をお引き受けしたのですが、事業仕分けでコースが終了することになってしまいました。非常に残念なことだと思っています。

奥羽大学の先生方も積極的に学会発表を行い、できるだけ学会誌等に論文を発表し、大いに外部に向けて情報発信をして頂き、奥羽大学の存在感を示して頂きたいと思っています。

今後の奥羽大学歯学会の発展を祈念して筆を置かせて頂きます。